Ⅳ　薬師寺西塔の調査

薬師寺の依頼をうけ、１９７６年7月5日から１９７６年8月２５日まで、西塔基壇および周辺の発掘調査を行った。

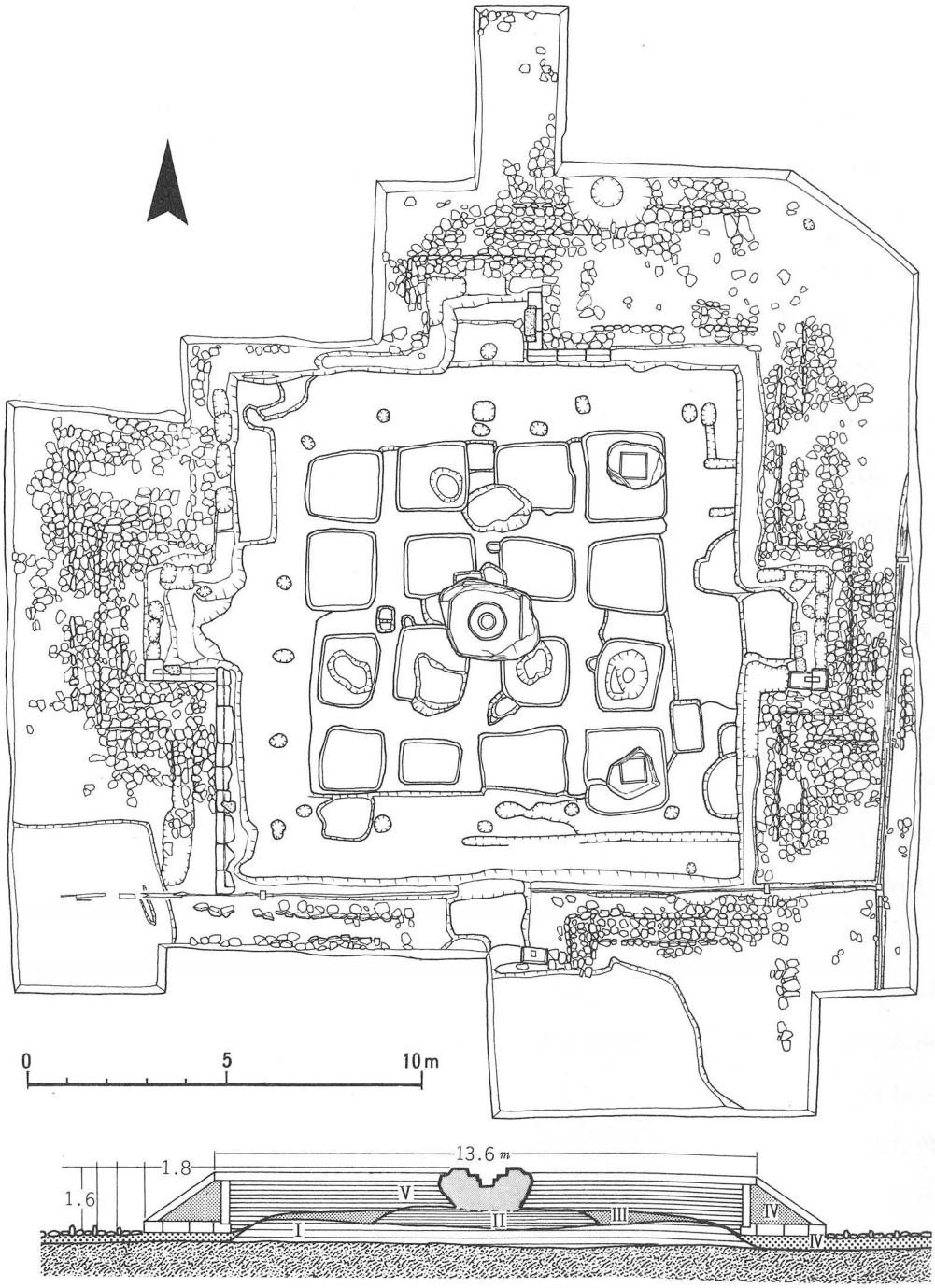
西塔跡については過去２回の調査が行われている。第１回は文殊堂の解体撤去された１９３４年に、足立康氏によってなされ、塑像片・和同開珎・勾玉等をえている。第２回は１９６９年で、杉山信三氏等によって西面階段が発掘された。

1　遺　構

基壇は一辺約１３.６ *m* の正方形で、復原高は1.4 *m* となる。四面の中央に幅３ *m* の階段がとりつき、基壇から1.8 *m* 出ている。現存基壇の上面から約７０ *cm* 下までには、焼失時の焼土を含む撹乱土が堆積していた。これを除去して、砂土と粘土の互層で積み固める基壇積土を検出した。残存する３個の礎石のうち、心礎は原位置にあるが、他は移動している。基壇上面では四天柱と母屋柱の礎石を据えつけた掘形を１６個検出した。掘形は一辺約1.5 *m* の方形であるが、すでに根石等の据えつけ痕跡は検出できなかった。裳層の礎石掘形については四天柱、母屋柱の掘形にくらべて浅いためか、すでに削平されていた。なお、心礎には掘形がないので、心礎のみは基壇築成前に据えつけていたとみられる。

基壇の築成は掘込み地業を行わず、旧地表面から土を積上げている。築成工程は大まかに４段階に分かれる。第１段階は旧地表に瓦やバラスを敷きつめたのち、粘土とバラス土を互層に比較的細かくつき固める。第２段階は心礎の部分のみに細かい版築を行い、この段階で心礎を据えつける。第３段階は基壇上面まで大まかに版築し、四天柱等の礎石位置に掘形を掘込み、礎石を据える。第４段階は各辺の階段部分に土を積み、基壇化粧を行う。

基壇周囲の地覆石はほとんど抜きとられていたが、西面南半部と北面の一部に当初の形で残っていた。石質は花崗石で羽目石をのせる部分は一段低く細工し、基壇内にかくれる部分は自然面をのこす。地覆石の上に立つ羽目石は完全な形をとどめないが、痕跡によって幅６０ *cm*、厚さ２０ *cm* の切石であることがわかる。



第10図　薬師寺西塔遺構図

羽目石を立てただけで束石をともなわない古い形式で、先年の発掘調査で確認した金堂基壇の場合と同じである。

基壇の外周は一面の石敷とする。地覆石の外側を６０㎝幅で犬走りがめぐり、その外周に扁平な石を立てて側石とする雨落溝を設ける。また、基壇端から3.5ｍの位置には、一列にならべた立石（見切り）が方形にめぐる。この立石列は一辺２０.６ｍの正方形をなし、西塔域を画する施設と考えられる。敷石はさらに外方に向ってのび、あるいは回廊内の全域に敷きつめられていたのかもしれない。なお、創建時の石敷面は享禄の焼失時（1528年）にはすでに埋もれていたらしく石敷と焼土面との間には灰黄褐色砂土の自然堆積が介在している。

他の検出遺構としては、発掘区南端にやや時代の降るとみられる池の汀線と、発掘区東辺と基壇南辺にそって、石敷や基壇をこわしてつくる近世の竹筒の上水施設がある。

2　遺　物

今回出土した遺物は、莫大な量の瓦類のほか、塑像、銭貨、金具、土師器（灯明皿）などがある。

塑　像

東西両塔には釈迦八相の群像が安置されていた。八相のうち入胎・受生・受楽・苦行の因相が東塔に、成道・転法輪・涅槃・分舎利の果相が西塔に配置されていた。今回出土した塑像片には頭部、手、胴部、足、袈裟、甲などがあり、なかには如来像、菩薩像と判定しうるものもある。また、彩色や金箔が残っているものもある。胎土は雲母の多い緻密な粘土を用いている。この他、塑像の胎土とは異なる砂粒を多く含んだ破片がある。直線や曲線の凹凸に富む文様があり、白土で彩色されている。これらは諸相の背景となった山岳や巌洞、台座を現わした一部であろう。

瓦　類

軒瓦約８００点と丸・平瓦が焼土混り褐色土層から出土した。軒瓦は焼失時に近い室町・鎌倉時代のものが多く、本薬師寺式や奈良時代のものは一割にもみた

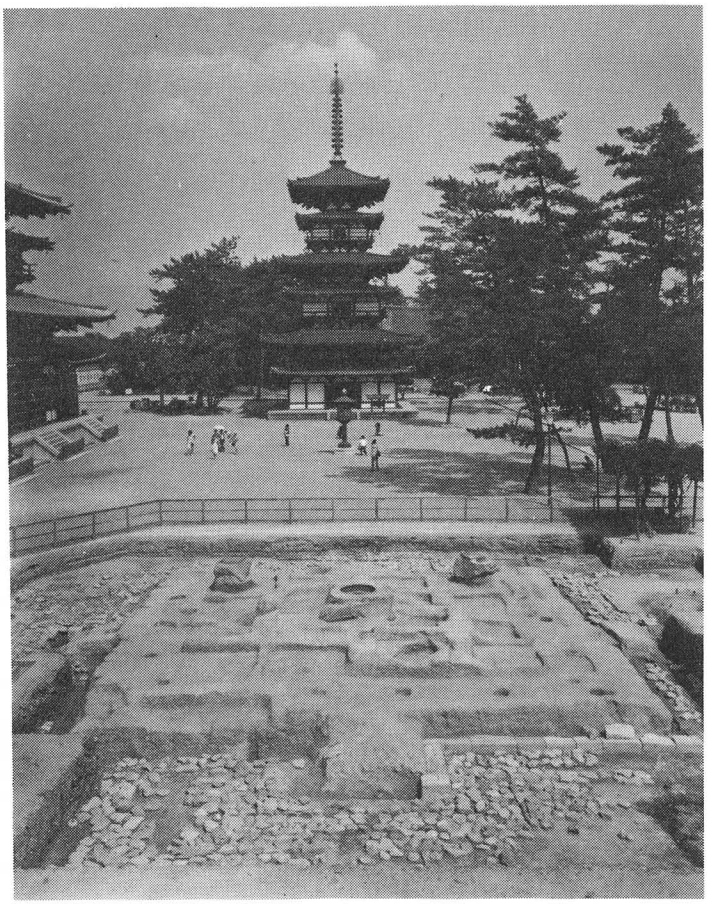
ない。焼失する頃までに、創建時の瓦はほとんど葺替えられていたのであろう。

金属製品

棰先飾り金具、厚板、塑像芯銅線、鋲、帯状留め金具などの青銅器が出土した。青銅厚板には「第二□」と陰刻したものがあり、相輪の一部とも考えられる。銭貨には和銅開珎2枚のほか、淳祐元宝、祥符元宝、景徳元宝、寛永通宝などがある。ほかに釘、カスガイ、座金具などの鉄製品が多い。

土　器

土器類はきわめて少量であり、焼土層と灰黄褐色砂土から須恵器の小片と灯明皿が若干出土したにすぎない。



第11図　薬師寺西塔基壇（西から）